

美術専攻 洋画研究領域

シュ カイリン

朱 海倫



「漂いながら、触れるⅠ」/「漂いながら、触れるⅡ」

油彩、シルク、パネル

## 「漂いながら、触れるⅠ」/「漂いながら、触れるⅡ」

本作「漂いながら、触れる」では、デジタル化の進展の中で失っていく「世界とのつながり」を、理想化・仮想化された形態として絵画の中に再び再現することを試みた。

デジタル技術は成熟化し、それがもたらす仮想体験が必然的に私たちの生活に浸透している。身体は明確に区切られた空間の中で、次第に平滑で閉じた線形的な環境に順応していく。しかし、人の感覚は理性的な判断のみによって成り立つものではなく、流れや変化、リズムといったものを直感的に受け取る力にも支えられている。中国の伝統的な風水思想において重視されてきたのも、人と環境との間に生じるこうした動的な関係——すなわち、気の流れや空間の開閉、そしてその中で身体が感受する感覚である。現代はこうした感受性が弱まり、私たちは知らず知らずのうちに世界や自然との距離を広げてしまっている。本作は、このような日常的な感覚を出発点とし、絵画を通して、失っていく緩やかで微細ながらも持続するつながりを、改めて意識化しようとするものである。

今回の制作において、麻布等の油画における伝統的な支持体では無く、あえて草木染めによるシルクをパネルに張り画布として使用した。そしてその素材がもたらす偶然性や流動性によって、画面により豊かな揺らぎが生み出された。

抽象的な曲線によって構成された画面に、繰り返し現れる円・点とそれを結ぶ線は、自身の「ノード・リンク構造」への関心に由来し、中国古代の星図や道教哲学における概念関係の可視化にも見られる表現である。それらは単なる位置情報ではなく、関係性や流れを示す視覚的形式である。同時に、コラージュ的な手法によって、極めて人工的な境界線を画面内に導入し、「流動」と「秩序」とを対置させ、仮想化された感覚を構築している。本作を鑑賞することで、仮想と現実の界において世界が別のかたちで流れ、存在し続けていることを感じ取ってほしい。